



Press Release

2017年2月24日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 7-1-5
www.lilly.co.jp

EL17-12

うつ病に関する患者調査

～多様な症状に対する理解の不足により、相談が遅れる実態が浮き彫りに～

自分がうつ病になる可能性「思っていなかった」が約6割

うつ病患者の4人に1人、受診までに「1年以上」
周囲の理解が回復につながることも明らかに

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:パトリック・ジョンソン、以下、日本イーライリリー)は、過去にうつ病と診断され現在は社会生活に復帰している、または復帰に向けて調整している20代～60代の男女517名を対象として、2016年11月17日～11月18日にインターネットによる調査を実施しました。

(調査監修: 一般社団法人 日本うつ病センター理事長 樋口 輝彦 先生、認定特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ)

うつ病は、脳の働きに何らかの機能障害が起こることで発症すると考えられています。うつ病を客観的に血液検査や脳画像などで診断することは難しく、症状の程度、質、継続期間、生活への支障の度合いなどから医師によって総合的に判断されます。日本におけるうつ病の生涯有病率は6.2%、12か月有病率が2.1%^{*1}といわれており、うつ病や自殺による日本の経済損失額は、年間で約2.7兆円^{*2}に上るといいう推計結果も公表されています。

今回の調査は、人によりさまざまな症状が現れることから、本人には時に自覚しにくく、周囲の人にも気づかれにくいうつ病について、患者さんの疾患に対する認識および回復の途上における周囲との関わりについて明らかにし、今後の患者さんのサポートに役立てる目的で実施したものです。

主な調査結果は以下の通りです。

■自分がうつ病になる可能性がある「思っていなかった」が約6割

うつ病と診断される前、自分がうつ病になる可能性があるかどうかを尋ねたところ、59.8%が「思っていなかった」と回答しました。

■4人に1人(27.3%)が、医療機関を受診するまで「1年以上」

最初にうつ病の症状を感じてから医療機関を受診するまでの期間について尋ねたところ、「1年以上」が27.3%で最も多く、「6か月～1年未満」も合すると35%に達しました。受診までに6か月以上を要した理由のトップは「自分の頑張りや気持ちのもちようで不調を解決できと思ったから」(45.9%)で、「性格の問題で病気ではないと思ったから」(35.4%)と続き、うつ病に対する理解の不足が受診を遅らせている実態が浮き彫りになりました。

■うつ病の多様な症状に対する理解度「だるい、重い、様々なところが痛い」は50.3%

うつ病と診断される前のうつ病に対する認識を尋ねたところ、「気分の落ち込み・眠れない・食べられない」という症状については72.3%がうつ病の症状であることを理解していたものの、「だるい、重い、様々なところが痛い」という症状については50.3%の理解にとどまり、症状により理解度に違いが見られました。

*1 川上憲人:平成18年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)「こころの健康についての疫学調査に関する研究分担研究報告書」(2006)

*2 厚生労働省:「自殺・うつ対策の経済的便益(自殺やうつによる社会的損失)」(2010)

■うつ病による多様な症状、医師に伝えられたかどうかは症状によって異なる

後にうつ病と診断される不調のために最初に医療機関を受診した際、どの症状を医師に伝えたかを 12 項目で尋ねたところ、「いつもより早く目がさめるし、寝ようとしてもなかなか寝付けない」については、その症状があった人全体の 91.2%が「医師に伝えた」と回答した一方、「体のあちこちがずーんと重く感じる」では同 77.7%、「着替え、歯磨きなど身の回りのことが、おっくうに感じられてできない」では同 67.4%など、症状により伝えられたかどうか異なることが分かりました。

■うつ病に対する周囲*3の理解 「配偶者」「友人」では8割超、「職場の人」「地域・近隣の人」では5割台

自分がうつ病と診断されたことを伝えた相手(周囲)が、うつ病を理解してくれたかどうかを尋ねたところ、「配偶者」で 82.4%、「友人」で 81.7%が「理解してくれた」と回答しました。一方、「職場の人」では「理解してくれた」が 57.5%、「地域・近隣の人」では 55.3%で、立場の違いによりうつ病に対する理解度に差があることが判明しました。

■周囲に伝えた人の約8割が、周囲の理解が回復に「役立った」と回答

周囲の理解がうつ病からの回復にどの程度役立ったか尋ねたところ、「とても役立った」「ある程度役立った」と回答した人の合計は、全体の平均で 78.2%でした。また、回復に役立った具体的な周囲の行動を尋ねたところ「普段通りに接してくれた」が第 1 位でした。

日本イーライリリーは、今回の調査結果を受けて、うつ病についての正しい理解を促す啓発活動に引き続き取り組んでまいります。

■動画「うつ病を経験したわたしから大切なメッセージ」

日本イーライリリーは、うつ病による多様な症状に対する正しい理解を促し、当事者が適切な治療と、周囲からの適切なサポートを受けられるようになることを願い、うつ病患者さんが症状を感じてから回復に向かうまでの道のりを当事者の視点から描いた動画を制作。ウェブサイト『うつ病 ころとからだ』(<http://utsu.ne.jp>)で公開しています。



認定 NPO 法人「地域精神保健福祉機構・コンボ」について

「精神障害をもつ人たちが主体的に生きて行くことができる社会の仕組みづくり」を目的とし、2007 年 2 月に設立された NPO 法人です。「当事者の視点」を活動の重点に据え、当事者、家族および専門職を対象とした情報提供や、ACT・家族心理教育・就労支援など科学的根拠にもとづくプログラムの実践および普及活動、そして、地域精神保健福祉の発展に資する活動などを主に行っています。<https://www.comhbo.net/>

日本イーライリリーについて

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの子会社で、人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じて日本の医療に貢献しています。統合失調症、うつ、双極性障害、注意欠如・多動症(AD/HD)、疼痛、がん(非小細胞肺癌、膵がん、胆道がん、悪性胸膜中皮腫、尿路上皮がん、乳がん、卵巣がん、悪性リンパ腫、胃がん、結腸・直腸がん)、糖尿病、成長障害、骨粗鬆症、乾癬などの治療薬を提供しています。また、アルツハイマー型認知症、関節リウマチなどの診断薬・治療薬の開発を行っています。詳細はウェブサイトをご覧ください。<http://www.lilly.co.jp>

うつ病に関する患者調査 概要

目的： うつ病患者の疾患に対する認識および回復の途上における周囲との関わりについて明らかにする

調査主体： 日本イーライリリー株式会社

監修： 一般社団法人日本うつ病センター 理事長 樋口 輝彦 先生

認定特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ

調査地域： 全国

調査方法： インターネット調査(マクロミルモニタを利用)

調査対象： うつ病と診断され、現在社会生活に復帰している、または復帰に向けて調整している
20代～60代の男女 517名
(双極性障害または統合失調症と診断されたことがある方を除く)

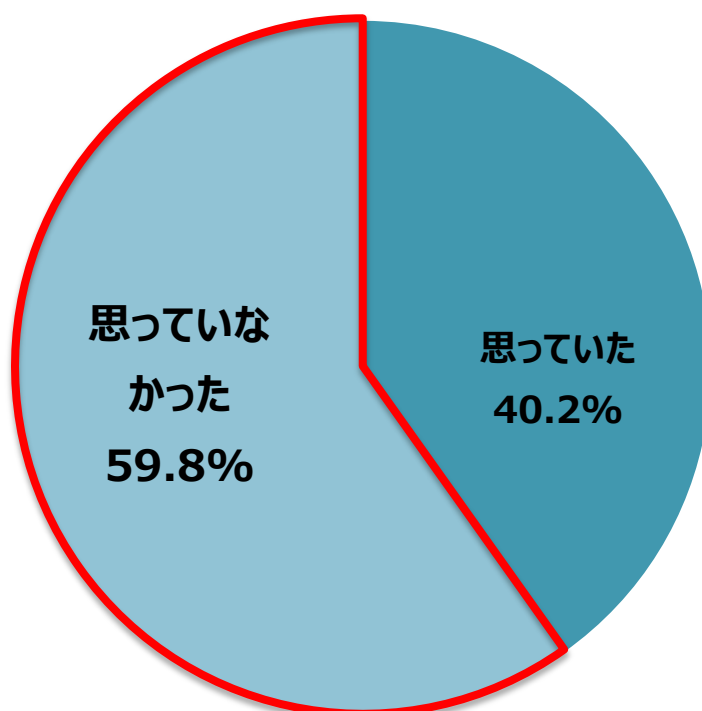
調査期間： 2016年11月17日～2016年11月18日

※調査結果は小数点以下第2位を四捨五入しました。

調査結果

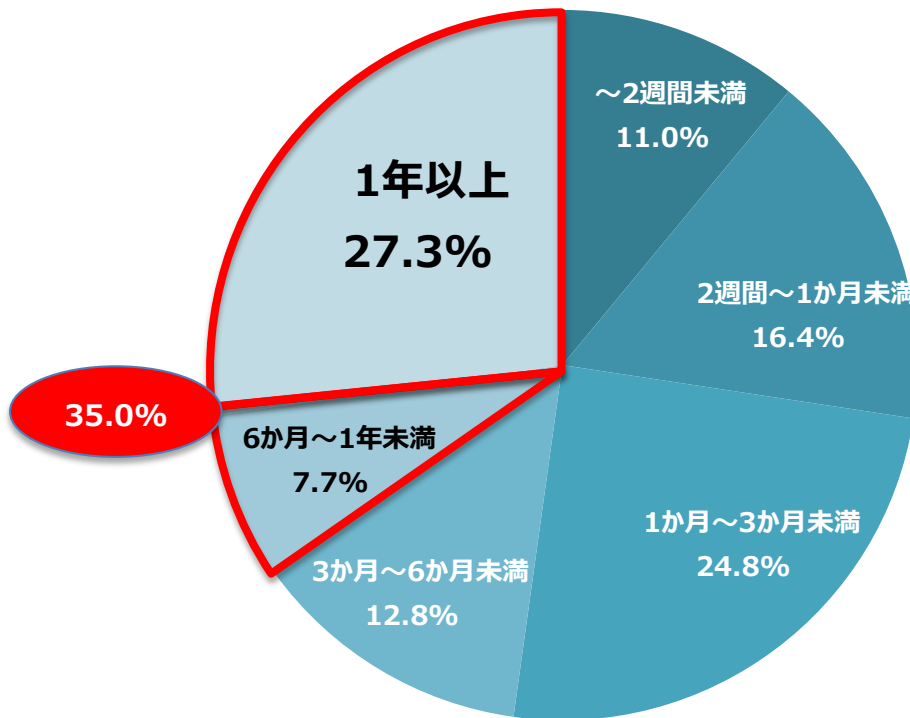
グラフ① 自分がうつ病になる可能性があると「思っていなかった」が約6割

Q. うつ病と診断される前、自分がうつ病になる可能性があったと思っていましたか。(ひとつだけ)
(n=517/単一回答)



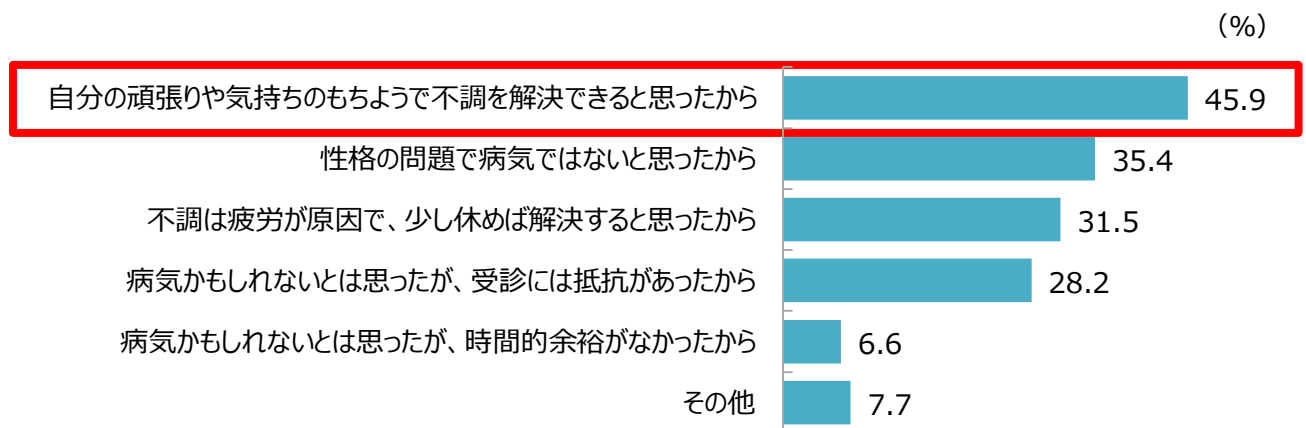
グラフ② 4人に1人(27.3%)が、医療機関を受診するまで「1年以上」

Q. うつ病に関して、最初に症状を感じてからどれくらいたってから医療機関を受診されましたか。
あるいは他疾患でのかかりつけ医に知らせた場合は、その時期を教えてください。
(n=517/単一回答)



グラフ③ 受診までに6か月以上を要した理由のトップは「自分の頑張りや気持ちのもちようで不調を解決できと思ったから」

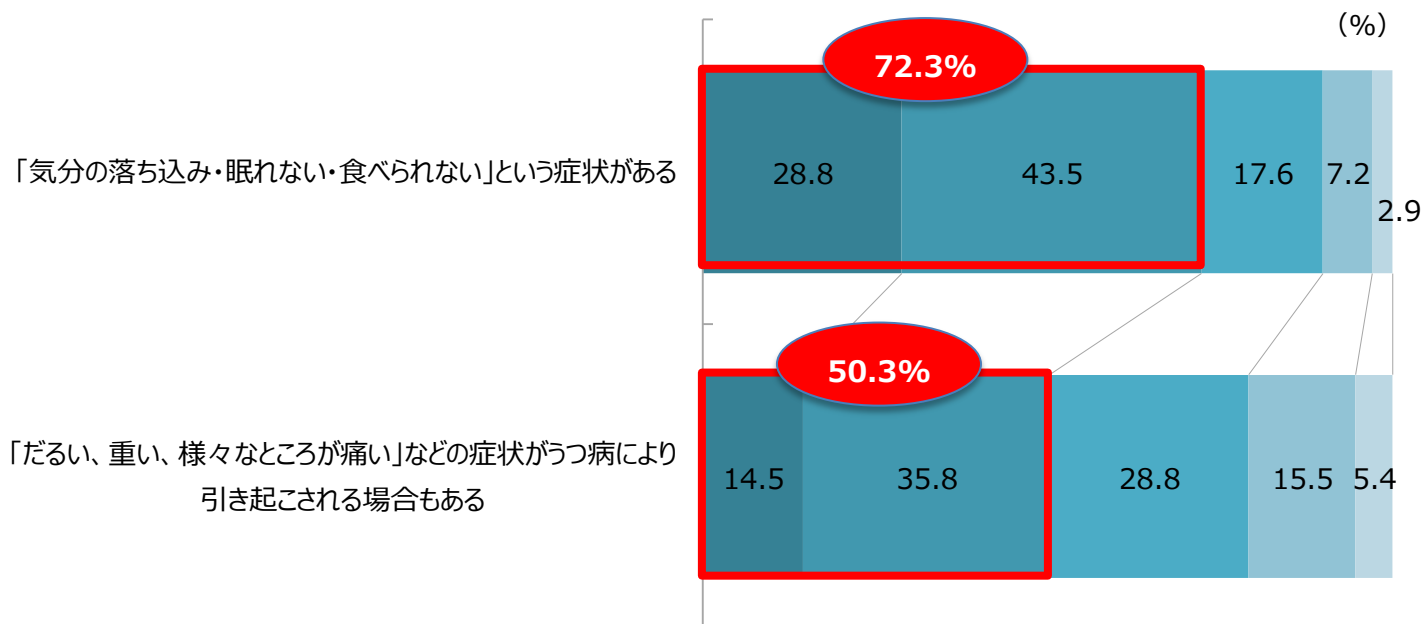
Q. うつ病に関して、最初の受診までに6か月以上を要した理由について、あてはまるものを選んでください。
(n=181/複数回答)



グラフ④ うつ病の多様な症状に対する理解度に差 「だるい、重い、様々なところが痛い」は 50.3%

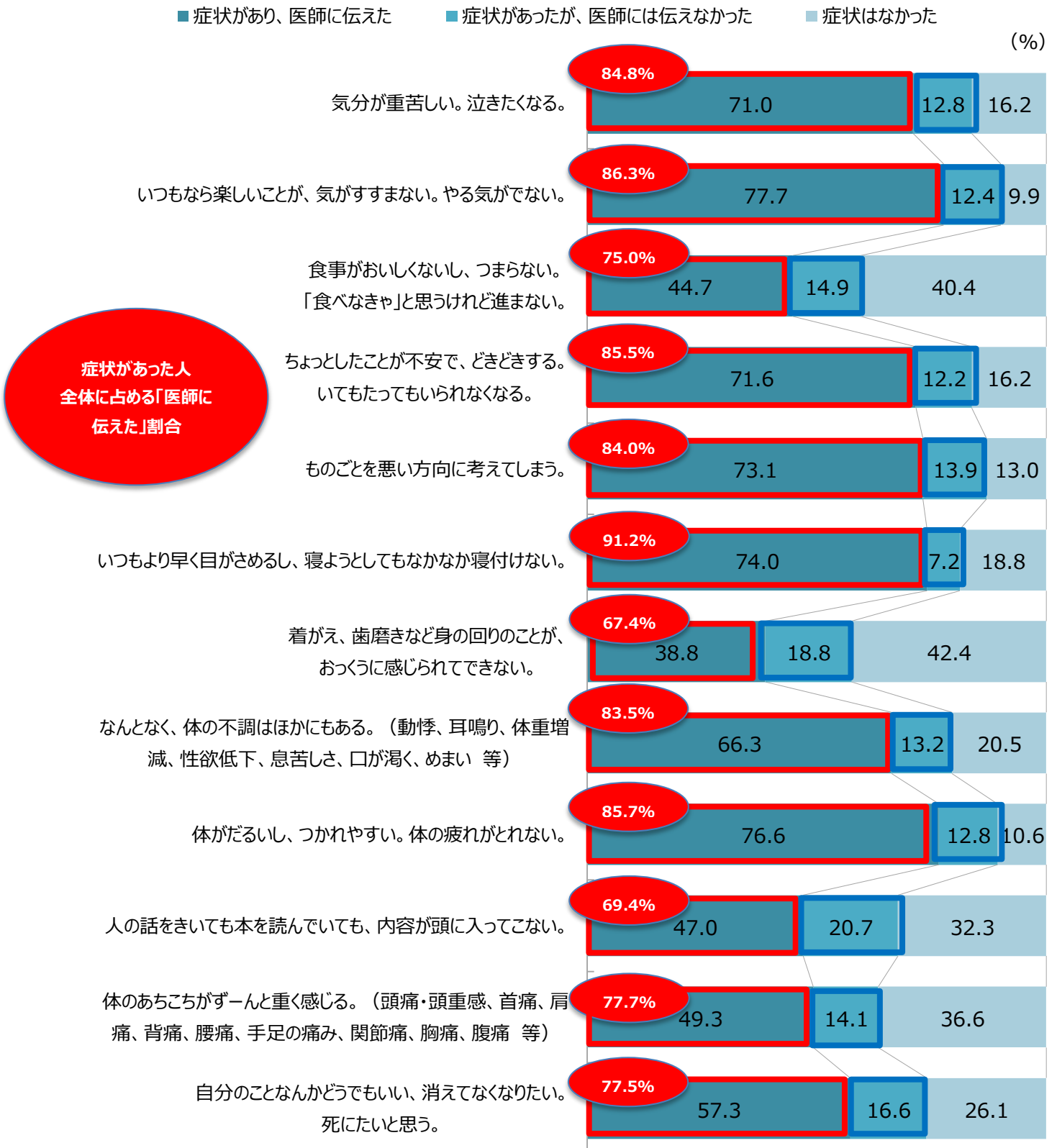
Q. うつ病と診断される前の、うつ病に対する認識として、下記の選択肢にどの程度同意するかをそれぞれ1つ選んでお答えください。
(n=517/単一回答)

■ 非常にあてはまる ■ あてはまる ■ どちらともいえない ■ あてはまらない ■ 全くあてはまらない



グラフ⑤ 医師に伝えた症状と、伝えなかった症状

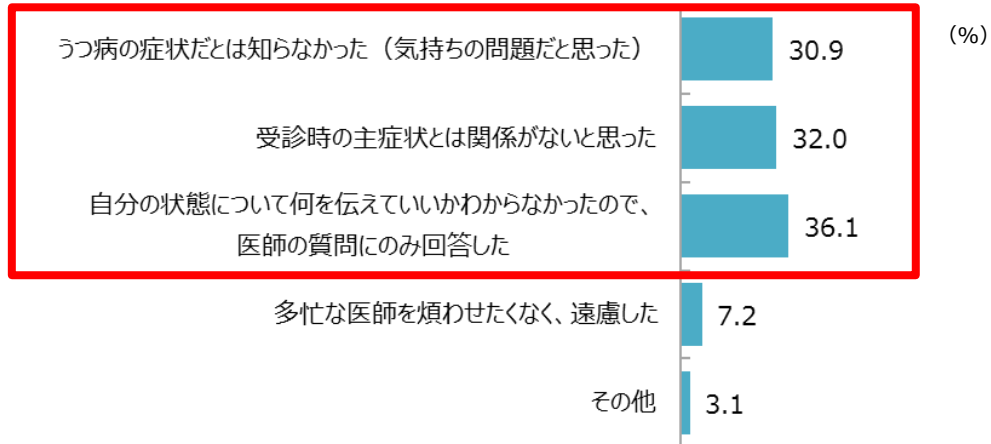
Q. 後にうつ病と診断される不調のために最初に医療機関を受診したとき、具体的にどのような症状がありましたか。また、どの症状を医師に伝えましたか。あてはまるものをそれぞれ1つだけ選んでください。
(n=517/単一回答)



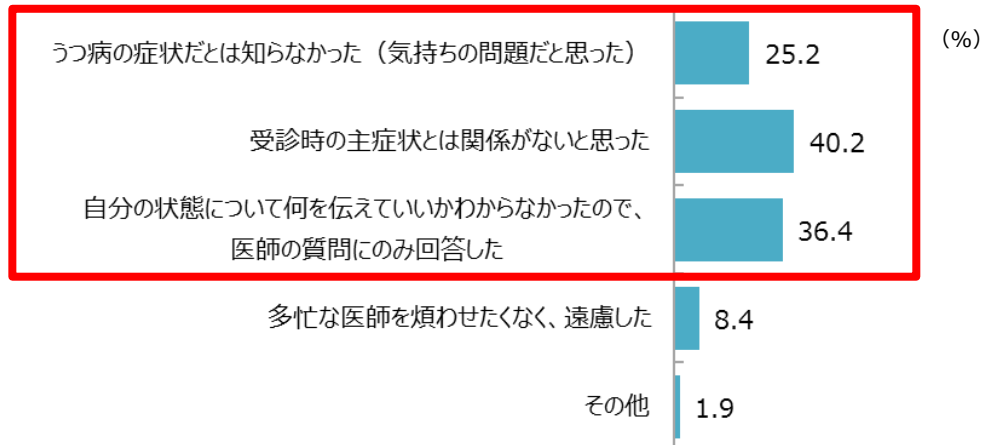
グラフ⑥ 症状があったが、医師に伝えなかった理由（「症状があったが伝えなかった」下位 5 項目）

Q. 感じておられたすべての症状を医師に伝えなかった理由として、それぞれあてはまるものを全て選んでください。（いくつでも）（複数回答）

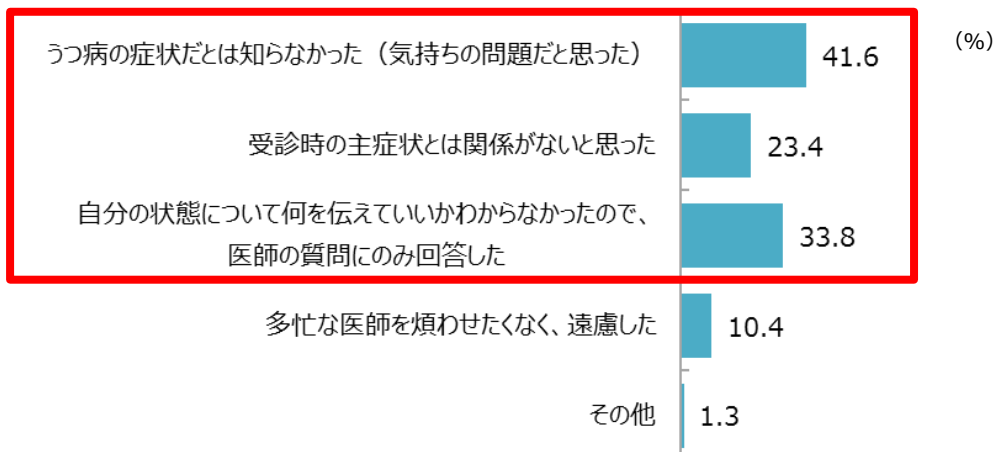
[7. 着がえ、歯磨きなど身の回りのことが、おっくうに感じられてできない。](n=97)



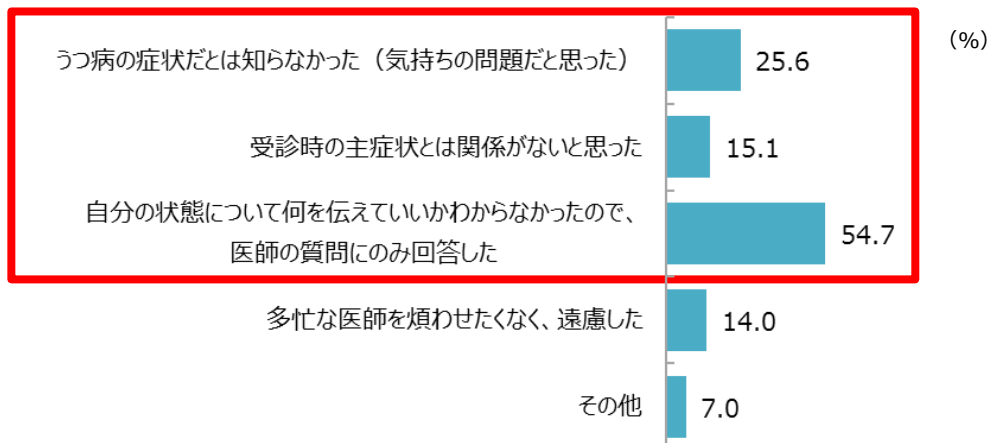
[10. 人の話をきいても本を読んでいても、内容が頭に入ってこない。](n=107)



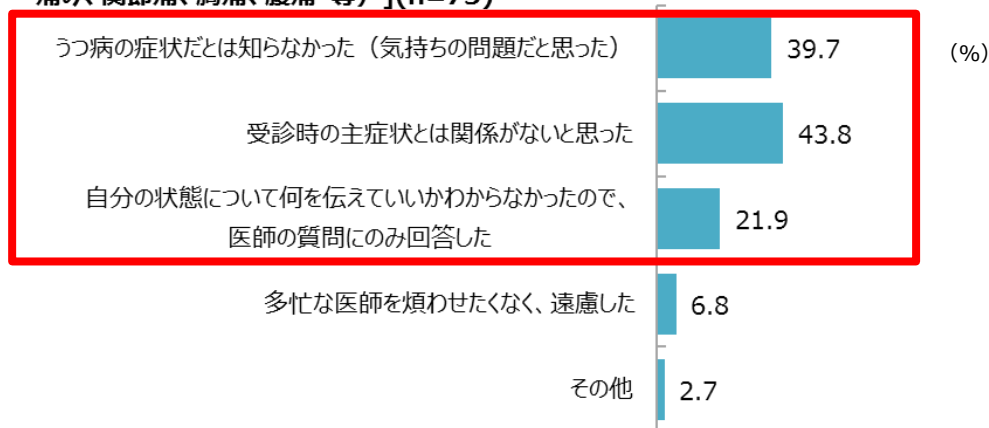
[3. 食事がおいしくないし、つまらない。「食べなきゃ」と思うけれど進まない。](n=77)



[12. 自分のことなんかどうでもいい、消えてなくなりたい。死にたいと思う。](n=86)

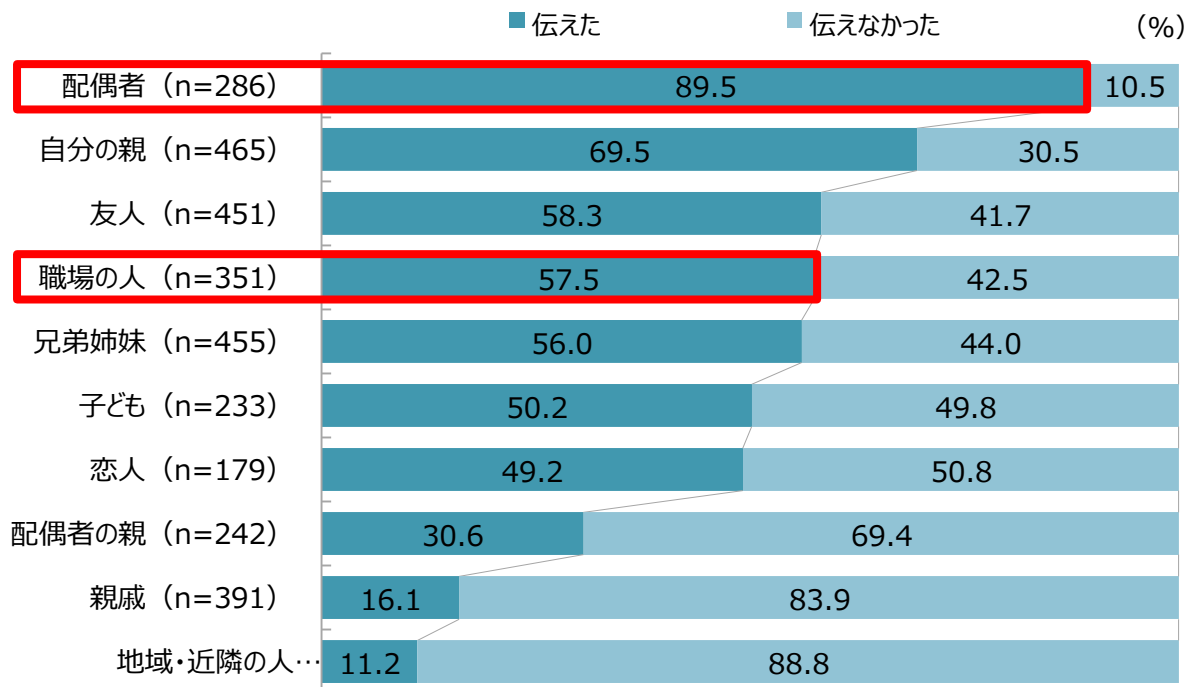


[11. 体のあちこちがズーンと重く感じる。（頭痛・頭重感、首痛、肩痛、背痛、腰痛、手足の痛み、関節痛、胸痛、腹痛等）](n=73)



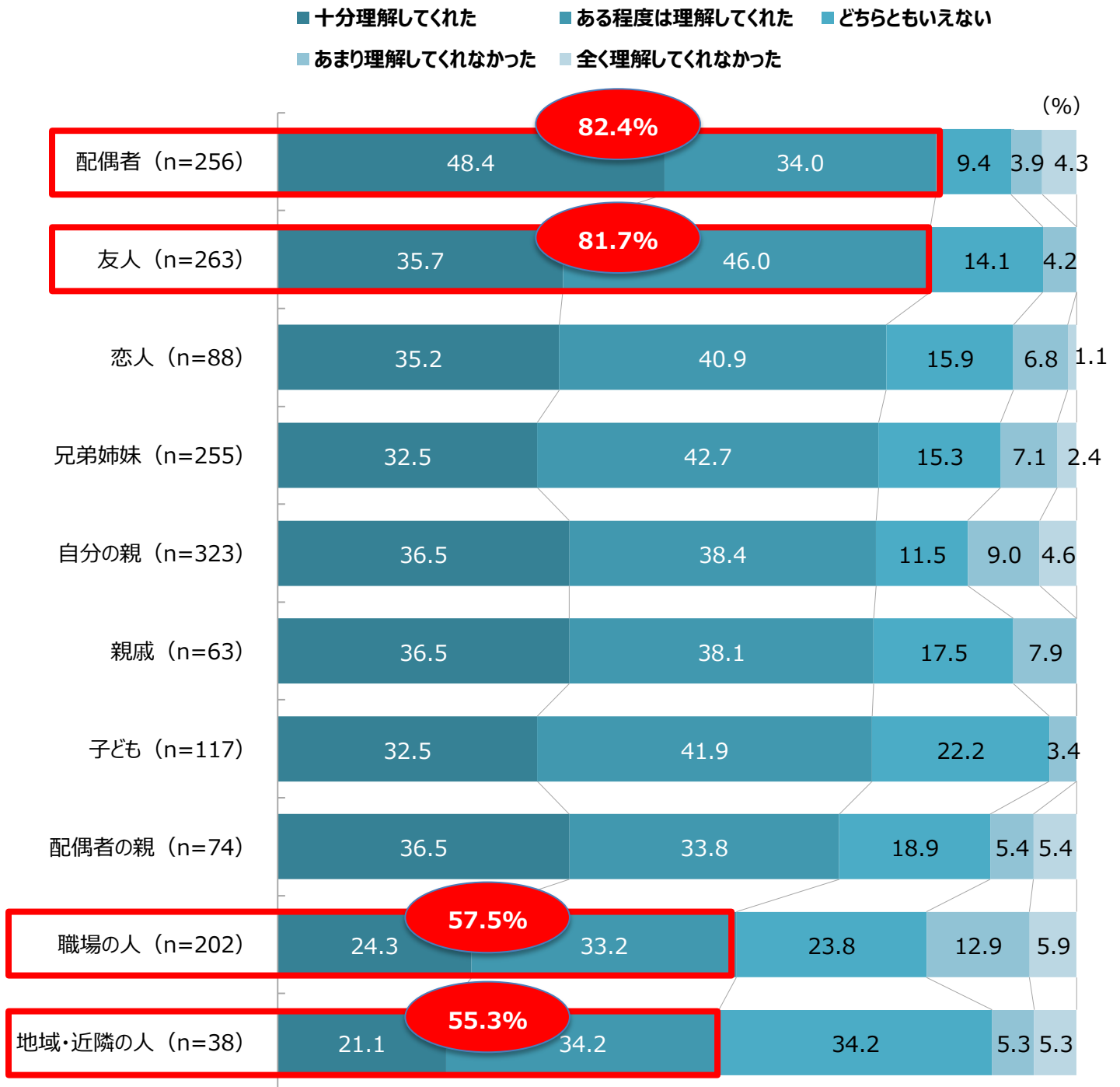
グラフ⑦ うつ病と診断されたことを職場の人に伝えたのは 57.5%にとどまる。配偶者に伝えた人は 89.5%

Q. あなたがうつ病と診断されたことを周囲に伝えましたか。それぞれの項目から1つ選んでお答えください。それぞれの項目について該当する人が複数いる場合は、最も身近な方についてお答えください。(それぞれひとつずつ)(n=517/単一回答)



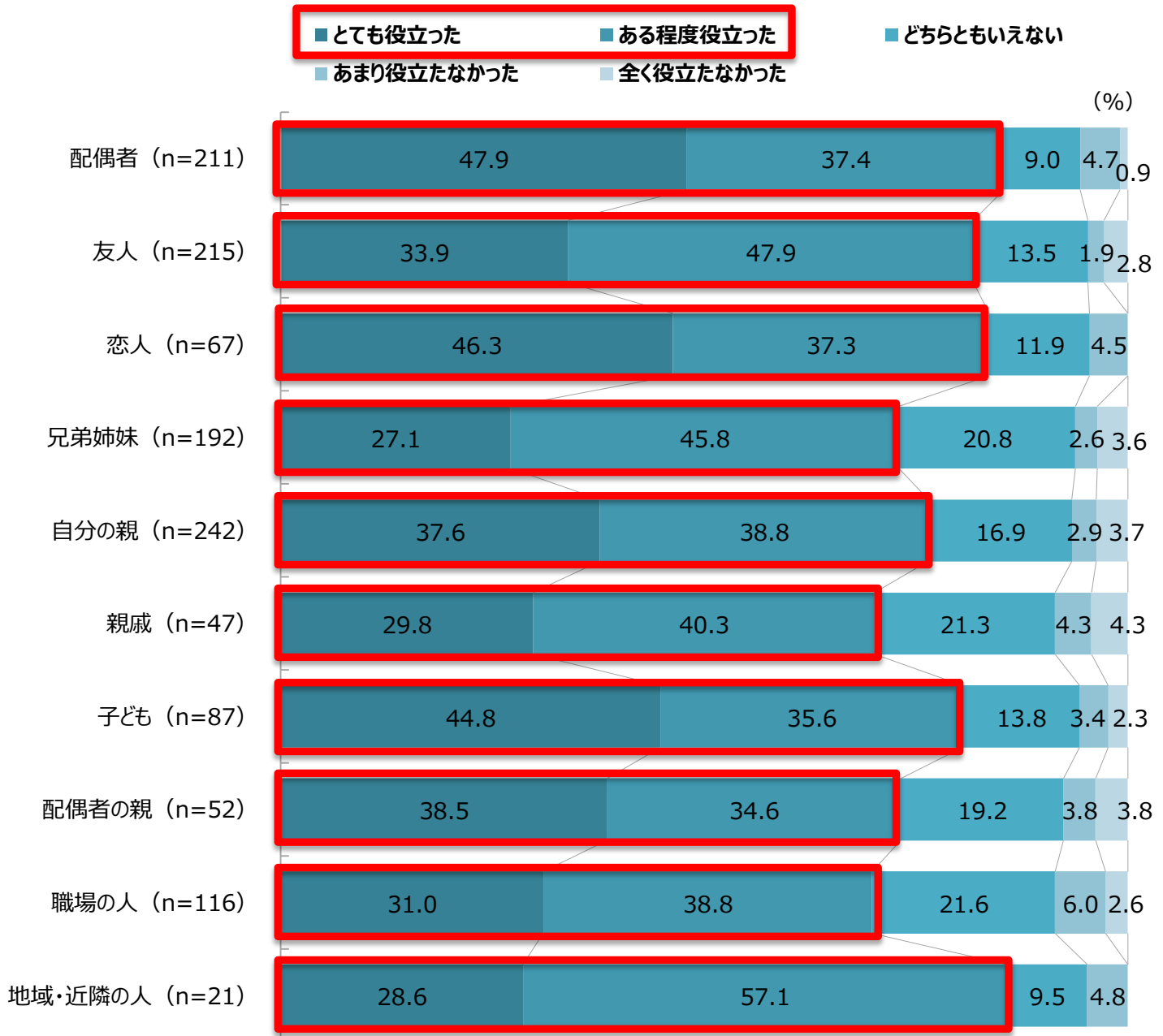
グラフ⑧ うつ病に対する周囲の理解 「配偶者」「友人」では8割超、「職場の人」「地域・近隣の人」では5割台

Q. あなたがうつ病と診断されたことを伝えた以下の方は、うつ病を理解してくれましたか。それぞれ1つ選んでお答えください。該当する人が複数いる場合は、最も身近な方についてお答えください。
(それぞれひとつずつ)(単一回答)



グラフ⑨ 周囲に伝えた人の約8割が、周囲の理解が回復に「役立った」と回答

Q. 前問でお答えの人がうつ病を理解してくれたことは、うつ病からの回復にどの程度役立ちましたか。
(それぞれひとつずつ)(単一回答)



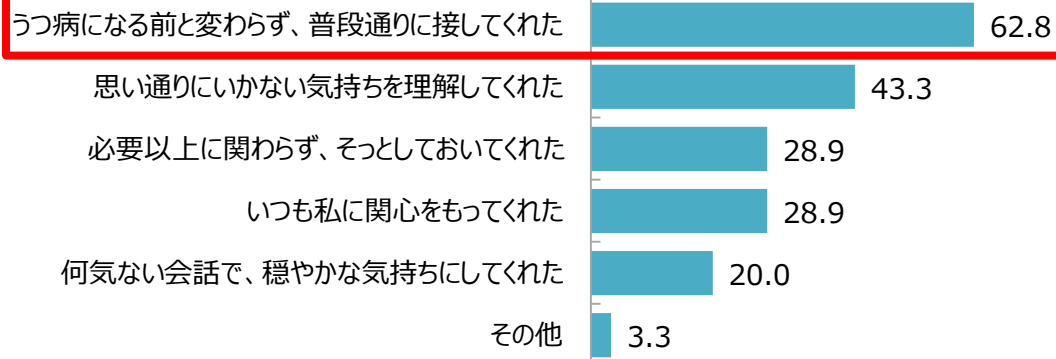
平均 78.2%

グラフ⑩ 回復に役立った具体的な周囲の行動

Q. うつ病について理解してくれていた人のどのような行動が回復に役立ちましたか。
それぞれあてはまるものをすべて選んでください。(いくつでも)(複数回答)

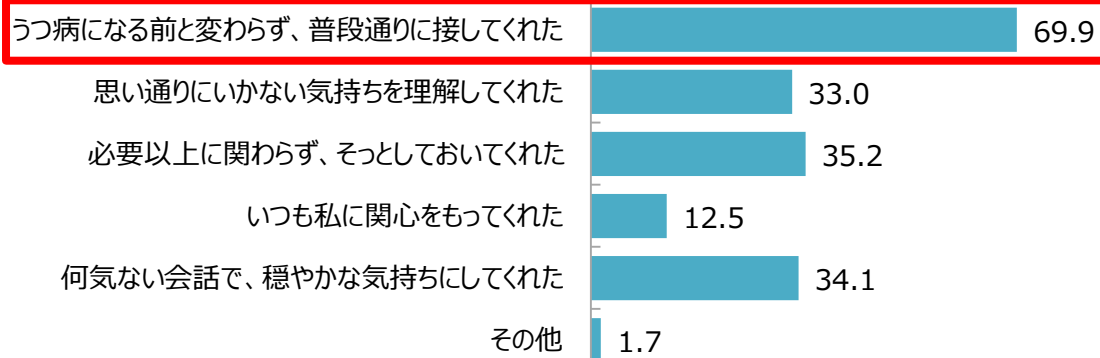
[配偶者](n=180)

(%)



[友人](n=176)

(%)



[職場の人](n=81)

(%)

